

今月の谷口雅春先生のお言葉

# 子供のもつ善性を引き出す生活とは

批評の言葉で子供の天才を

摘み取ってはならない

子供を育ててゆく上において、まず心得ておかなければならないのは人間は皆一様いちようのものでないことであります。天分もちがえば過去の念の集積もちがう。(中略)です。すから、子供をよくしようと思う時に、大人の、しかも自分だけの尺度でもって判断しすぎて善悪を評価するといけないのであります。人間というものは皆個性がちがう。個性がちがうところにそこに価値がある。桜の花とバラの花とはどちらが美しいかというと、これは評者ひょうしゃ

の好き嫌いで定まるので、桜がいつそう美しいという人もあれば、バラがいつそう美しいという人もあります。それを自分だけの好き嫌いでもって、「お前桜のように、そんなに一晩で散るような寂しい姿じゃいかん。バラの花のようにならねばいかん」と言ったところが、それはできないことを望むのであります。桜は桜でその良さを認め、バラはバラでその良さを認めなければならぬのであります。人を教育するには自分が「こうありたい」という一つの尺度をもって、その尺度にちがうものは皆悪いと考え、お前は悪い悪いという批評を加えてゆきますと、その批評の言葉の力によって、その児童の天分は伸びず、「僕は悪いものだ、劣等児だ」という観念を

心に植えつけられて、ついにせっかくの天才児も一個の劣等児になってしまうのであります。

〔『生命の實相』頭注版第30巻88～89頁〕

### 子供の生活を正しい方向に誘導する

ですから、子供にはすべて、自己独特の个性的方法において表現する自由を与えなければならぬのであります。しかし、子供の思想および活力を正しい方向にむけるように誘導してゆくことは教育者の役目であり、ます。教育とは圧迫ではなく、誘導であり、「引き出し」であります。子供の欲望の中にはまだ整理されない雑草があることは認めなければなりません。この雑草を刈りとるには、善きものを誘導することによって、雑草が自然に枯れるような方法を採るのがもつともよいのであります。およそ庭を持つておられる方なら知っておられましょうが、庭の雑草というものは、それを引かなければ、あるいは刈りとらなければすぐ伸びてくるのであります。せっかくよき花を植えましても、一方でわざわざ種を植えて良き花を生長せしめたいと

思いましたも、種子たねも何も植えない雑草の方が急に生長したら、せっかく良き花を咲かせたいと思った草花が、なんでもない雑草に圧迫されて生長しないことになるのであります。ですから、児童教育にもその点を注意して、児童の生命を、その本来良き花を育て引き出すようにして、雑草を枯らすようにしてゆくとよいのであります。個性を尊重することも必要でありますけれども、人間は社会的生物でありますから団体生活を営むものであります。家庭も数人集まっていますから一個の団体生活であります。人間は人間ひとと書いてあって一人だけではないことを現わしているのです。「人」という字もお互いにもたれ合った姿、自他一体の互いに持ちつ持たれつの姿を表現した象形文字であります。このように人間は一人だけではなしに、自他一体、持ちつ持たれつの存在であって、ただ、一人だけわがままをやる、そういう心は雑草の心であります。そういう雑草の心は摘み取らなければいけないのであります。

〔『生命の實相』頭注版第30巻89～90頁〕

## 子供の心に、人から喜ばれる歓びを

周囲全体を一緒に生き生かしてゆこうという生活が、実相の顕あきわれた生活であります。周囲全体が皆栄えるように、皆が喜ぶように、現あわれる生き方ならば、そこに実相がよく出てくるのであります。ところが自分だけしたいことをして、周囲全体の空気が乱れるような行ないをする人があれば、その人は実相が出ていないのでありまして、みずから省みて、「これは自分の本物ほんものではない、贋いせものものである」こう気をつけて反省して、贋物の伸のびびることは自分自身でないのだから、自分自身でないものを伸ばしたとてつまらないからと考えて抑おさえてしまうがよいのであります。「本当の自分自身」——自他一体の心——一つの共通の神なる生命——を伸ばすようにしてゆきますと、その人はみんなから喜ばれる。無論みんなを生かすようにしておりますのですから、その人がいてくれるということはみんなから喜びを与えられるということになるのであります。だから、この実相が生活に現あわれるとか現あわれないとかいうことは、その人の生活

がみんなに喜ばれているか、みんなから嫌きらわれているかということによって定きまるのであります。ところで、みんなから喜ばれるようにするにはどういうふうにしたらいいかといいますと、みんなに与よくするようにするのがよいのであります。与よく、といいますが、金を与えるのではありません。(中略)何よりも大切なのはみんなから喜ばれるような深しん切せんな行ないをするように仕向けてあげることがいいのであります。人から喜ばれる歓あびを知ったならば、人は決して墮落だするものはありません。みんなから喜ばれますとその人が生長するのであります。これは念波の感応の原理によるのであります、人から「あの人がいるのであります」と善念を送られますと、われわれの魂たましいの生長は人々の良き念波を栄養として生長するのでありますから、人からありがたがられる事はその人自身が生長することになるのであります。ですから子供の心の雑草を刈り取るには、叱しかりつけけないで、良い行為をしたときに賞ほめるようにして「人から喜ばれる歓あび」の快味かひみを体験せしめてやるのがよいのであります。

〔生命の實相〕頭注版第30巻90〜92頁